とくしま建物再発見 ―③―

椿泊の町並み

手摺りに大工の心意気

椿泊の家の顔ともいえる手摺りは、遠洋漁業で町が潤っていた証でもある。手摺り越しに行われる表通りとの触れ合いは、今も昔も変わらない

「灯台もと暗し」とは、身近にあるものは、かえって本質がみえないことをいうが、伝統的な民家や町並みにもあてはまる。

徳島は民家の宝庫といわれ、その土地に合わせて、個性的で素朴な民家や町並みがつくられてきた。家は百年を目標に建てられ、あちこちに手を加えて大切に使い込まれていた。そのなかで木造二階建てという基本的な形態を守りながら、隣町のうだつのように一軒一軒の家では細かいところに工夫を凝らしている。それが、町並みに新鮮な変化と一層の個性を与えてきた。

阿南市の椿泊の町並みの特徴は手摺（すり）りで、意匠的に彫られた木製手摺りから最近のアルミ製まで、いくつかの世代に渡って用いられてきた。昭和初期の遠洋漁業によって椿泊が潤った折に、建設ブームが起こったといわれる。当時の様子を地元の人に聞いたり今日まで残された家を見たりしていると、かつてはほとんどの家に木製手摺りがついていたと思われる。

戦後になってもアルミ製手摺りが普及するまでは、木製手摺りがつけられてきた。なぜ椿泊で、このように手摺りが用いられてきたのであろうか。手摺りの元々の機能は子供などの落下防止であるが、家の中と表の通りとの間であいさつをしたりおしゃべりをしたりするコミュニティー装置でもあった。

県南の漁村集落には「ミセ造り」と呼ばれる、雨戸であり、また縁台のようにも使うことのできる装置が多いが、漁村という地域社会にはこのようなコミュニティー装置が必要であったのかもしれない。

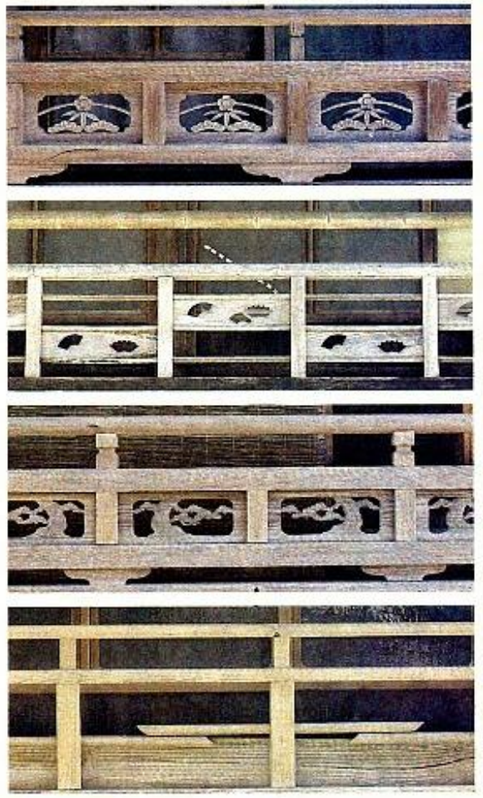
椿泊の手摺りには、町全体に京風の町屋が多かったとか、遠洋漁業で長崎や福岡に定住した人が親元に送った若金で手摺りがつくられたとか、里帰りした大工が福岡の料亭をまねてつくったなどの諸説があるが、遠洋漁業でいかに椿泊が潤っていたかの証（あかし）といえる。

家の玄関横につけられる手摺りは家の顔であり、大工の腕の見せ所であった。大工の優れた技量や遊び心のあふれた手摺りは、素朴であるはずの漁村集落の景観を妙になまめかしくしており、今日的な活動の背景になってもそぐわないものではない。腕を競って手摺りを飾った大工の心意気が今も損なわれず、椿泊の町並みに息づいている。（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

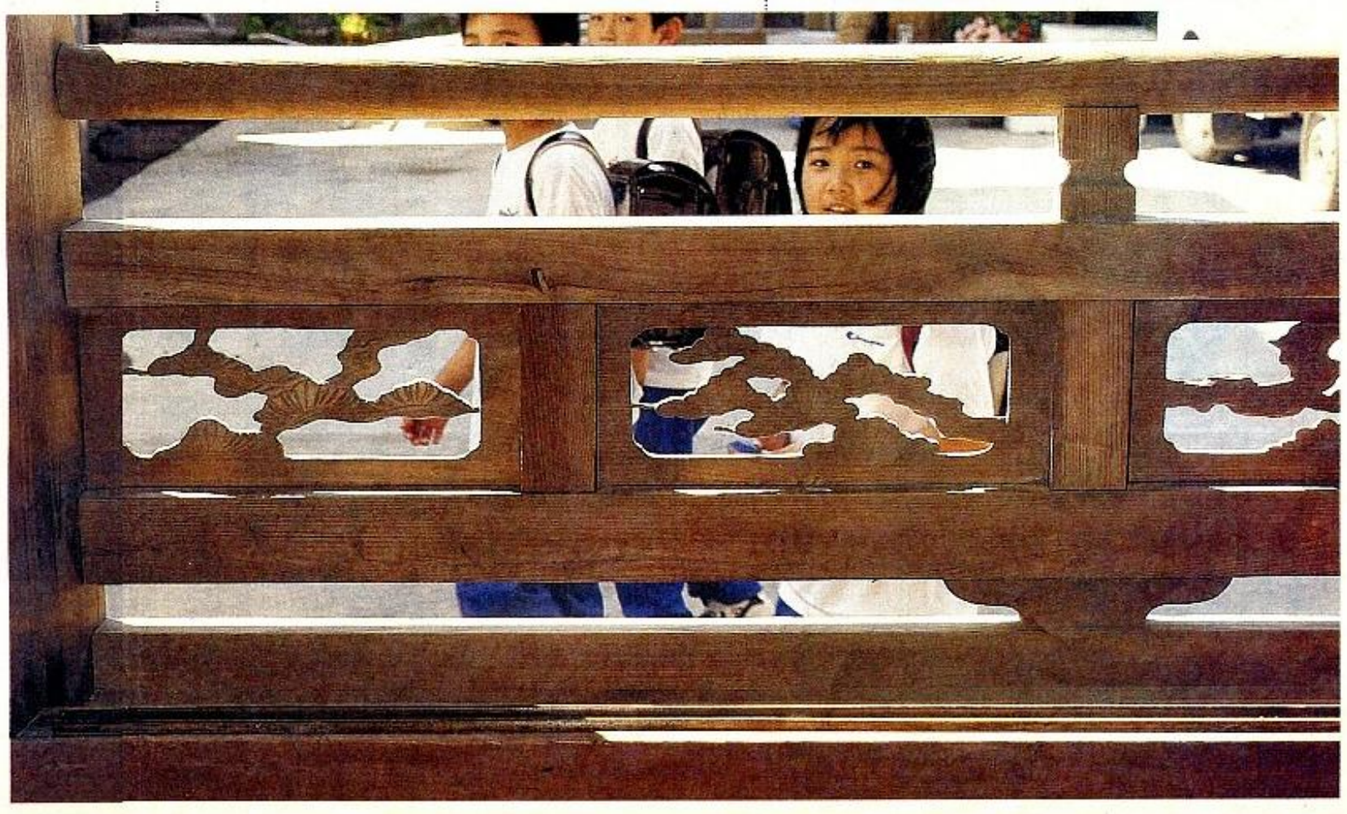
＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

山と海の間を縫って東西に延びる椿泊の町並み。間口、奥行きともに狭い敷地ぎりぎりに手摺りのある住宅が立ち並び、道路はあちこちでクランク状になっている＝寺谷地区

《メモ》椿泊　徳島県の東の端に位置する。蒲生田岬に守られ、椿泊が面する入り江は昔から海路を行く船のたまりであった。藩政時代には阿波水軍の森甚五兵衛が、土佐に対する備えから現在の椿泊小学校用地に松鶴城を構えた。遠洋漁業が盛んであった1940（昭和15）年には4500人が住んでいた。2000年3月現在は306世帯、887人。



さまざま表情・意匠を持つ手摺り。大工の技量、遊び心、そして心意気が息づいている



寺谷地区にある住宅の連続立面図＝阿波のまちなみ研究会作製

とくしま見　建物再発見 ―⑧―

出羽島(牟岐町)のミセ造り

暮らし支える2枚の板戸

海部郡牟岐町の東約四㌔の沖合に浮かぶ出羽島。出羽島の〝みち〟は、低い軒先が連なるミセ造りの住まいとネコ車(手押し車)で構成されている。

ミセとは漁村の住まいの軒先に設けられ、上部のウワミセと下方のシタミセとの二枚の板戸を合し合わせて雨戸として使い、晴れてシタミセを下ろすと店(ミセ)となって物品を並べたり、また作業台や縁側としても使えるコミュニティー装置である。以前に紹介した阿南市椿泊では、ミセ造りの多い地域に隣接していながらもミセ造りはみられず、手摺(す)りが用いられていた。

ミセ造りと手摺り。形は違っても漁村特有のコミュニティーを持つ集落の中で円滑な社会生活を営むためには、このような装置が必要であったのかもしれない。

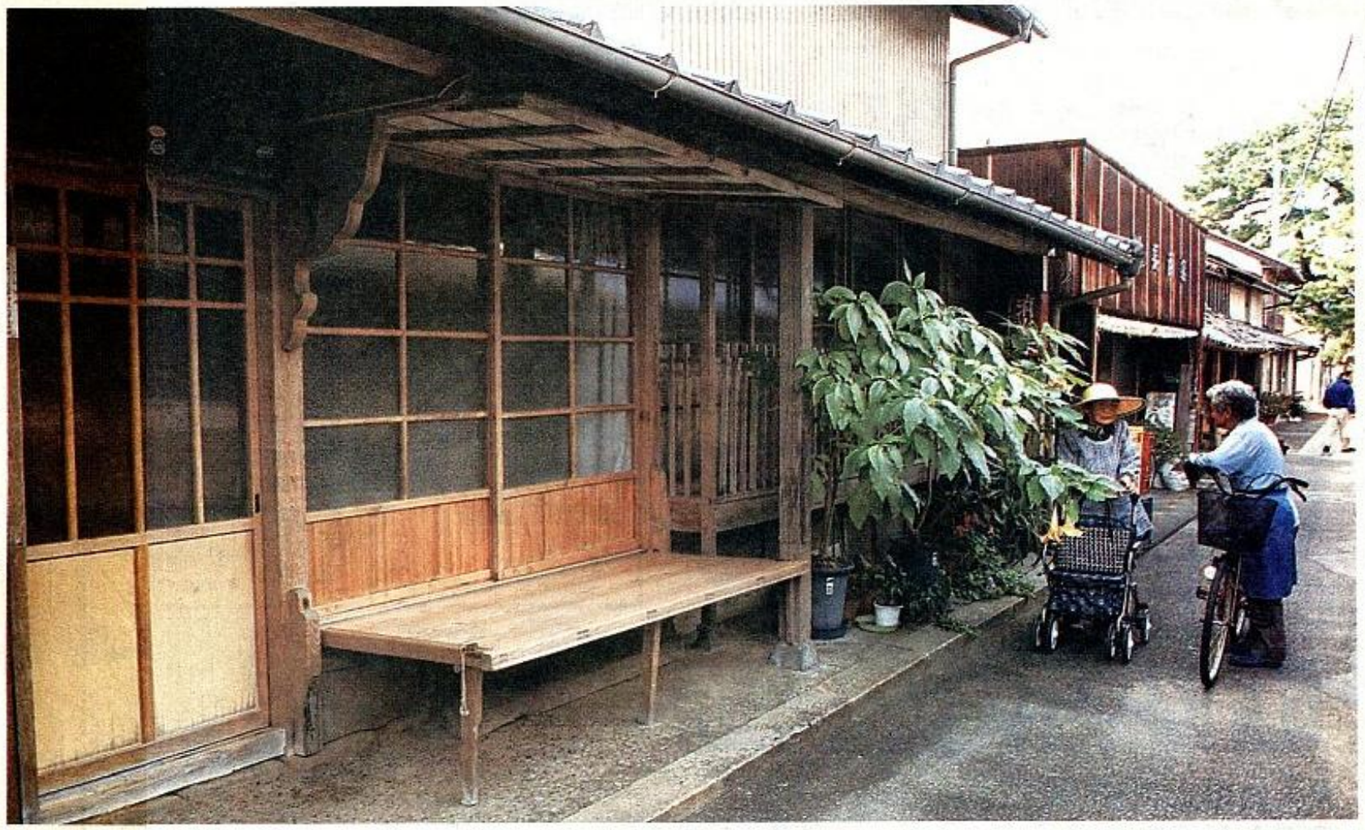
かつてミセ造りは徳島県南から高知県東洋町まで広く分布していたが、集中して見られるのは、海部町鞆浦や由岐町の西・東由岐、そして出羽島だけとなってきた。

なぜミセ造りが残されてきたか。それは出羽島が周囲から隔離された島であったことが大きく、そのため一層島内のコミュニティーが強くなり、独自の習慣や伝統が保たれてきたためであろう。そして、風が当たらない北側の港を囲む部分に歩いて暮らせる大きさの集落ができたという地形上の特徴が、自動車を必要としない生活を成り立たせ、さらに出羽島を象徴するネコ車をはぐくんできた。

車の通行を心配しなくてよい安全な〝みち〟が、いかに心地よいものか。その背景にこれまで繰り返されてきた生活の営みや、歴史を凝縮したミセやネコ車があり、それが今も現役のまま使われている。加えて、離れ島らしい静けさに包まれている。山に登ると、鳥の鳴き声や波の音、連絡船の汽笛、人の話し声が伝わってくる。そんな時、昔から連続する時の流れに触れられた思いがする。出羽島から牟岐港に帰ってきていつも感じるのは、牟岐の都会性と出羽島の素朴さ、そのコントラストの不思議さである。

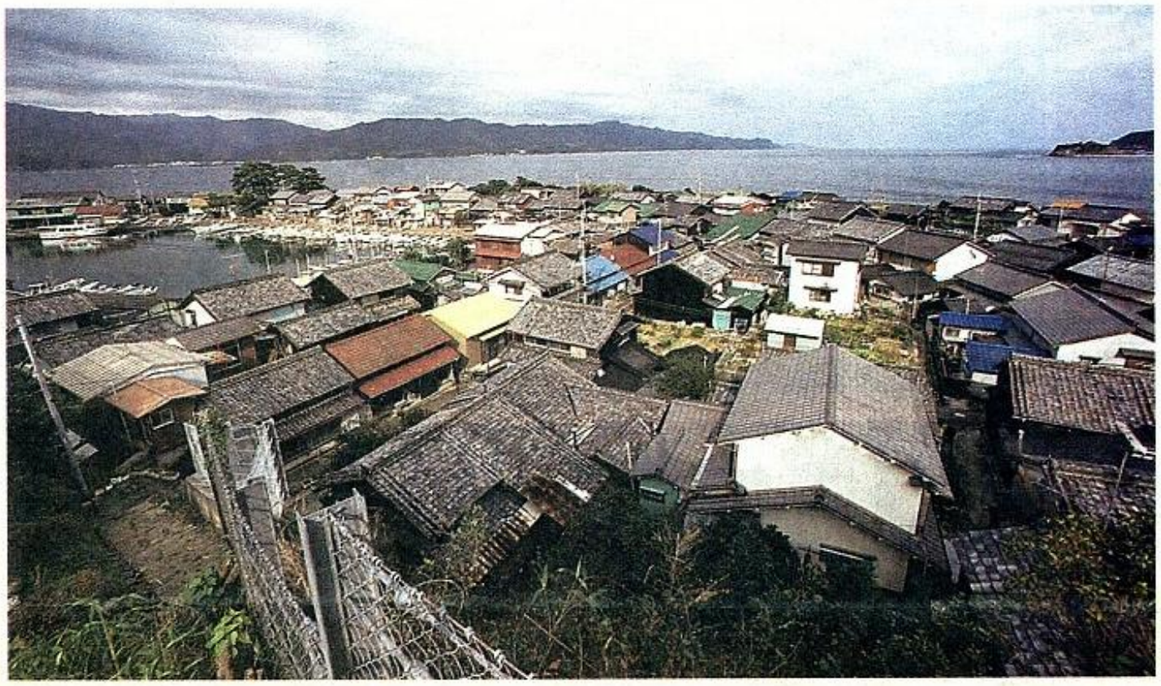
かといって、今の生活を捨てて出羽島で暮らしましょうというのではない。出羽島があまりに現代とかけ離れてしまっているのは明らかだから。ただそれゆえに、われわれが生活の快適さや利便性を追求してきた代償として、どこか本質を変えさせられた世界や置き忘れてきた大切な何かがありそうだ。そのようなことを出羽島は考えさせてくれる。

(田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太)＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。



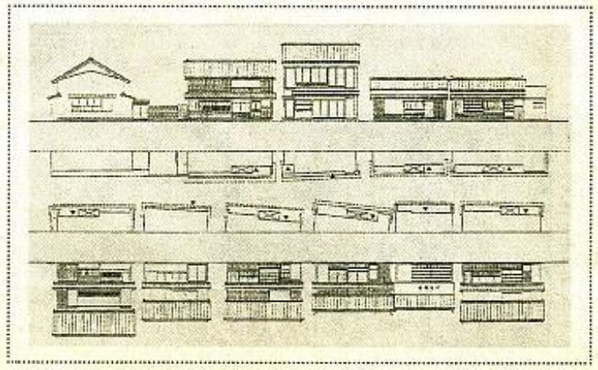
車に気兼ねすることなく立ち話のできる出羽島の〝みち〟。ミセ造りのある住まいが島の人々の暮らしを支える

島の人々の生活になくてはならないネコ車。ミセ造りと合わせ、出羽島のシンボルでもある



観栄寺近くからみた出羽島の集落。離れ島らしい静けさに包まれ、聞こえるのは波の音だけ

本町地区にある住宅の連続立面図
＝阿波のまちなみ研究会作製



《メモ》出羽島　南北982㍍、東西625㍍、面積0・5平方㌔の小さな島。現在は「てば」と称しているが、「では」といった時期もあるようだ。天然の良港で、台風時には他の地方から船を止めにきたといわれ、漁業の島として発展した。大正・昭和初期に遠洋漁業で最盛期を迎え、住民は1934(昭和9)年に166戸、約800人までになる。今日では200人まで減少している。

とくしま建物再発見 ⑬

鮎喰の町並み

伝統的な面影を残す

徳島市域のほとんどは、太平洋戦争の空襲で焼き尽くされ、復興により再生された新しい町である。蜂須賀公の庇護の下で繁栄し、戦前まで原形を保っていた城下町も町名や古地図などの記録でしか伺い知ることができない。ただ、かちどき橋の武家屋敷や安宅町にある阿波水軍の「加子屋敷」、そして鮎喰町の商家など、わずかながら戦禍を免れた藩政時代の建物が残されている。

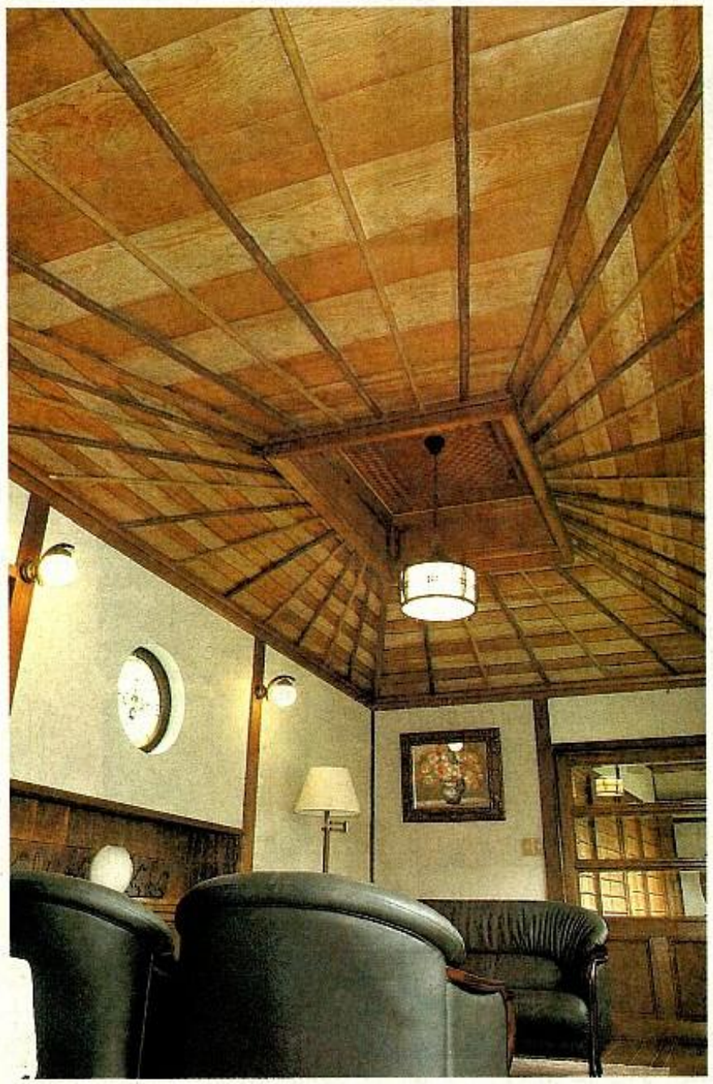
旧伊予街道に沿う鮎喰町は、江戸後期以降、鮎喰川以西からの阿波藍や藍などの集積地で、昭和初期まで蔵本とともに商人町として栄えた。建物は二階部分が半間下がった切り妻平入りが多く、「うだつ」「格子窓」「幕掛け」など、町屋的な装置をもつ商家が軒を並べる。一部に古い形式である厨子二階の建物も残され、かつては厨子二階も多かったと思われるが、本二階建てへの建て替えが進み、全般的に建ちの高い町並みとなっている。

棟札により一九一七（大正六）年の建築と確認されている木村浩信家は、鮎喰町の中でも立派な構えを持つ。江戸末期から明治期の建設とみられる西隣の吉本酒造は、間口が広いうえに建ちが低く、水平性が強いが、木村家の高さはこれと対照的である。建築年代の違いの結果といえるが、そのような個性がそれぞれにありながらも二つの建物の間に違和感はなく、一体となって歴史的で伝統的な町並みを構成している。それは周りが新建材で建て替えられる中にあって、木や土・漆喰という自然で本物の材料が使われていることが共通項となり、一層周りとの対比を鮮明にしているかのようだ。

木村浩信家の母屋と離れの間にハイカラな応接間がある。放射状にデザインされた竿縁の二重天井と丸形ステンドグラスの窓など、大正ロマンの流れをくむ自由な遊び心の表れであるが、その底には家を大切に使っていくという昔ながらの思いがある。木村家の基礎をなした綿布問屋業は太平洋戦争末期から営まれていないが、建物の手入れは行き届き、旧伊予街道に面する「ミセ」は今すぐでも商売が再開できそうな存在感に包まれている。

かつての町は、一つの建物を大切に使う気持ちや、町並みの調和から大きく逸脱しない時代を反映した個性を持っていた。それらが部分的にでも残されることで、より多彩で重層的な風景や町並みとなる。鮎喰町は、そのようなことを教えてくれる徳島市では数少ない実例である。

（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

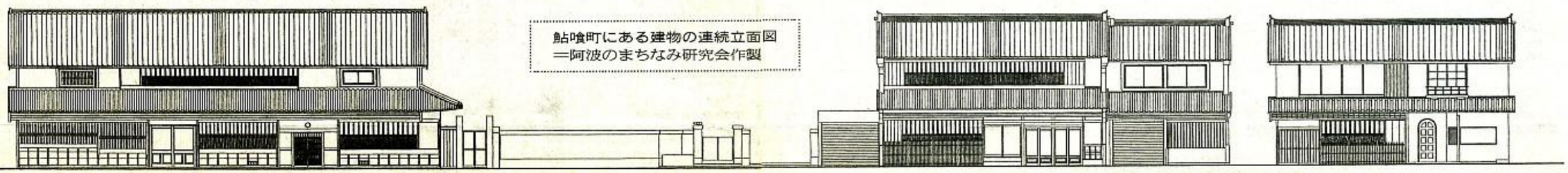


木村浩信家の応接間。ハイカラなデザインは、大正ロマンの流れをくむ遊び心と同時に、家を大切に使おうという思いが込められている

旧伊予街道に沿う鮎喰町の町並み。うだつや格子窓など、町屋的な装置を持つ商家が軒を並べ、歴史的、伝統的な雰囲気が漂う

《メモ》旧伊予街道　藩政期の徳島城下から他国に至る4街道のうちの一つで、阿波と伊予を結ぶ延長約200キロ。現在はバイパス化で国道192号に振り変わっているが、当初の街道の一部分が「旧伊予街道」と呼ばれている。上鮎喰橋たもとから国道の北側を走る約1・3キロのうち、蔵本側約900メートルが鮎喰町。

鮎喰町　徳島の中心から1里（約3・9キロ）の距離であることを示す一里塚が残されている。蜂須賀家の城下町の一部として町方の支配を受け、物や人が行き来する交通の要衝、商人の町として栄えた。戦災に遭わず、酒造業を今も営む吉本家をはじめ、繊維織物の御問屋など、古い商家が残されている一方で、空き地化や建て替えが進んでいる。



鮎喰町にある建物の連続立面図
＝阿波のまちなみ研究会作製

とくしま建物再発見 ⑱

ゆとりはぐくむ山の民家

中瀧清文家（井川町）

徳島県は民家の宝庫といわれ、基盤産業であった農林漁業や、山、海、野などの地形に応じたさまざまな形態をもつ民家がある。その中でも特徴的なのは、祖谷地方を中心として山の中腹の斜面にへばりつくように建てられた「山の民家」で、全国的にもあまり例がないといわれる。徳島の民家調査を始めた当初、なぜあのような不便な場所に民家が存在し続けてきたのか疑問であったが、その解釈を与えてくれたのが井川町の中瀧清文家だった。

調査に行った先でごちそうになった話をするのは恐縮だが、棟札を探しに蒸し暑い屋根裏に入り、結局は見つからず、徒労に終わった疲れた体に、半田素麺に当たり、部屋から見下ろす雄大な山並みと、その中で響き渡る鳥や蜩の鳴き声に浸ることができた。徳島という小さな都市ではあるが、時間に追われながら、せせこましく生きる人間にとって、ある意味でぜいたくな、その場所に行かなければできない貴重な体験であった。その後、蜩の声は私にとって夏の山の民家調査の楽しみとなっている。

考えてみれば、通勤通学や買い物など移動することが生活の前提である現代と違って、生活の衣食住を自給自足で賄っていた時代では、水の確保と安全で生産性の高い場所に住むことが第一の条件であったであろう。雨が降れば広い山の斜面の水を集めて鉄砲水が発生する恐れがある谷筋より、山の上は安全であり、日もよく当たる。見晴らしの良さも条件として重要視されずとも、結果として周りの目を気にせずにすむというプライバシーが確保され、外敵から身を守ることにもなり、精神的なゆとりが定着につながったであろう。

働く場所も食物も家の周りにあり、ほとんどの生活が地域社会の中で完結する。

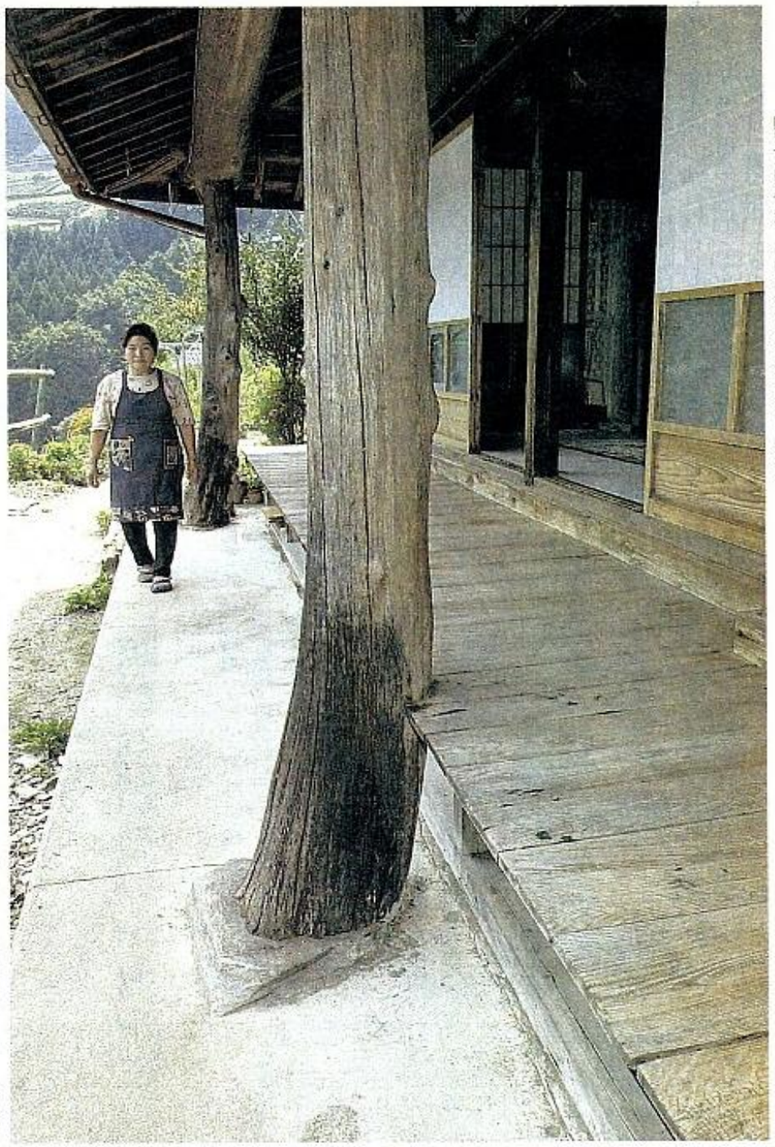
山の民家は、衣食住の自給自足という今日では考えられない時代の産物かもしれない。ただ、自然のそう快さや快適性にあふれた生活ぶりが今でも一部に残されているというのは、即効的な便益や論理的結果を求める現代に対して、何かを訴えかけているように思われるのである。

（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

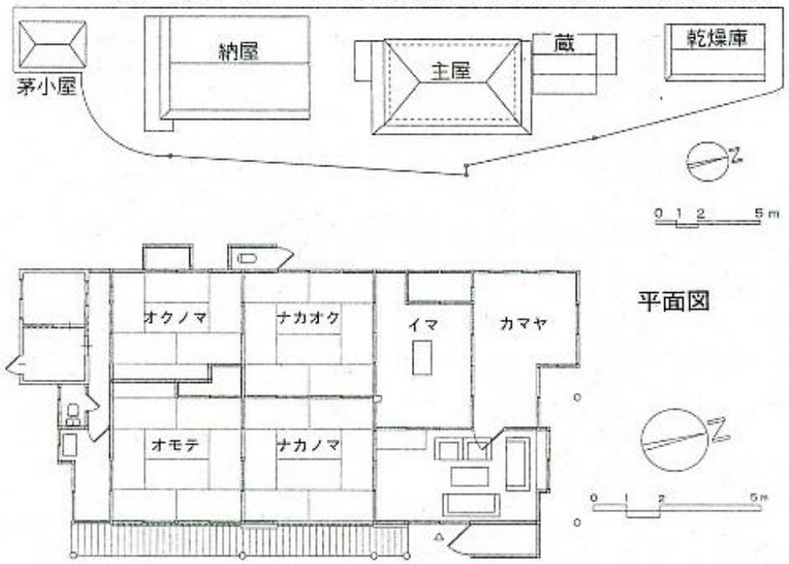
＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

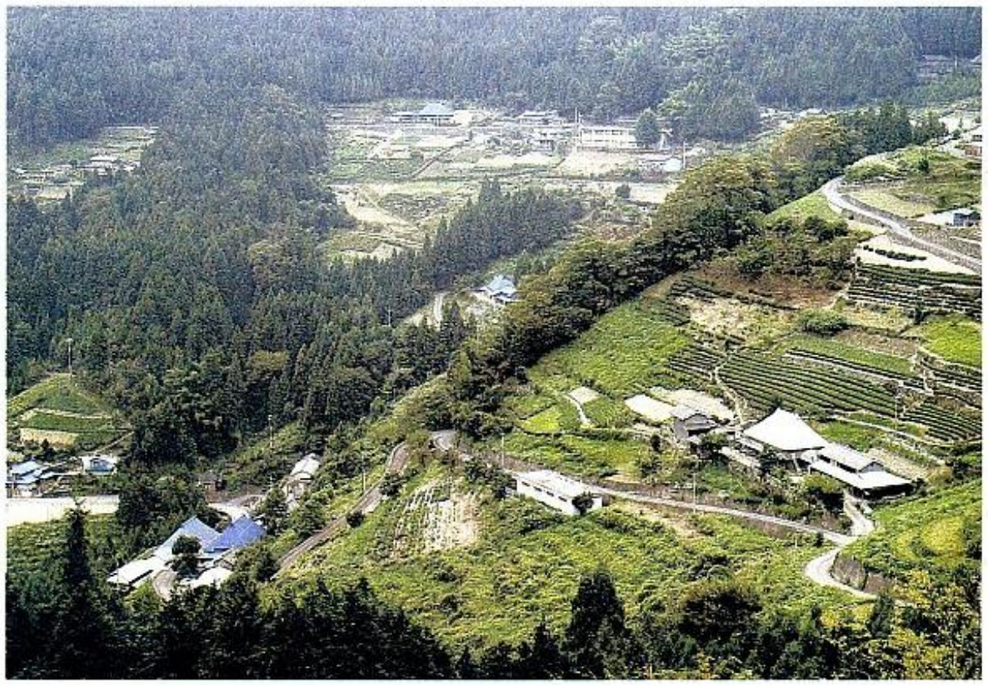
《メモ》民家　建築大辞典には「古代・封建時代における被支配階級（庶民）の住宅の総称。明治・大正年間に建てられても、封建時代に確立された民家形式に従っている住宅も含まれる」と定義されるが、今日では前者より後者の数や意義が高くなっている。庶民の住宅ゆえに、材料には地場でとれる安価なものが使われ、立地する場所の風土や産業に合わせて地域的にそれぞれ特徴ある形態をもつ。

中瀧清文家　井川町井内西2387。現職町長宅で、当家に伝わる「永代家系記録」によれば初代始祖は高知県赤滝の武士である。主屋は1773（安永2）年の建築といわれる。



精神的なゆとりをはぐくむ山の民家。主屋東側のオブタと呼ばれる軒先の柱、ぬれ縁、障子は住む人の生活を見詰めてきた





山の中腹斜面で生活を支えている民家。ここでは時間がゆっくりと流れる

オモテ座敷からオブタを通して望む山並み。さわやかな風が通り抜け、鳥や蜩の声が響きわたる

とくしま建物再発見 ㉔

立川家（井川町）

日本建築にない重厚さ

民家調査でおじいちゃんやおばあちゃんにヒアリングしていると、いろいろな思い出とともに暮らしてきた家に愛着や誇りを抱いているのを感じることが多い。建築は住み続けられ、その土地にずっと存在することで、意義とかアイデンティティー（個性）が生まれてくるように思われる。

立川家に初めてお邪魔したのは一九九三年七月末。阿波学会調査のため民家を探して町内を回るわれわれにわざわざ声を掛けて招いてくれただけに、家の造作はすごかった。柱、框、違い棚は黒檀、障子、襖枠は紫檀、舞良戸は半田産漆塗りの一枚板、大黒柱は欅七寸角の四方柾など。

棟めつけは、全国の伝統的建築物や庭園の実測調査をしてきた妻木靖延氏が指摘した、床柱の鉄刀木。「シタン・コクタン・タガヤサン」と呼称され、建築の世界でもめったに見られない三大堅木の中の最高級品である。

今回の取材でも、おばあちゃんが「大阪工業大学の妻木先生が、鉄刀木ってゆうてくれたんよ」とうれしそうに言っていた。

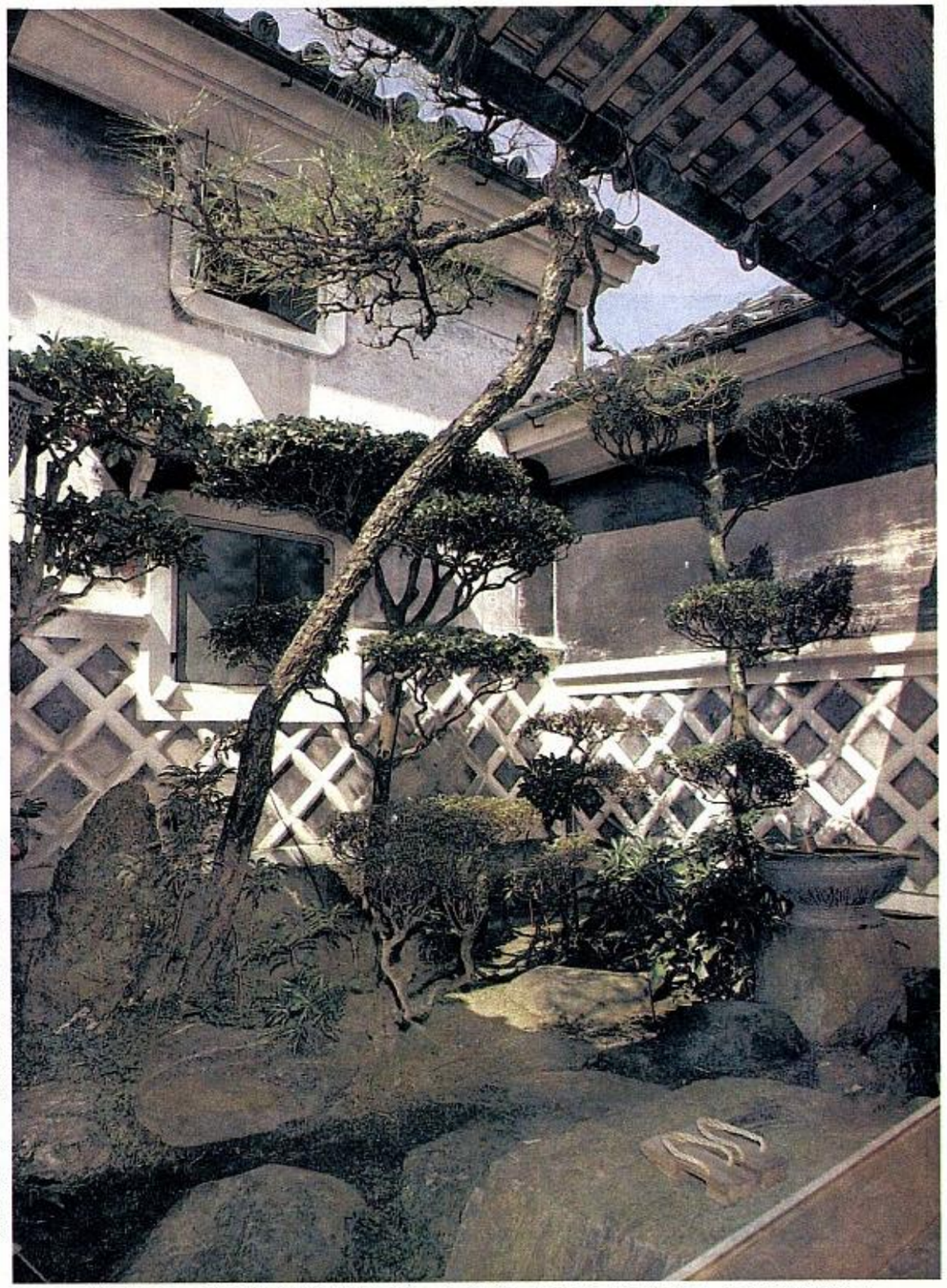
前に紹介した井川町の中瀧家のような地元で採れる材料を使った素朴な民家はかりに接してきた私にとって、贅を尽くした民家を徳島で見るのは初めてであった。こんな民家が徳島の井川という片田舎で成立できたことへの驚きとともに、山間部の生産地（中瀧家など）と消費地を結ぶ中継点の立川家という、たばこを介した地域社会の構造とシステム、その歴史を垣間見る思いがした。

立川家に入ると、重厚な木組みが生み出すどことなく重い空気を感じる。日本建築は木と土と紙でできているといわれ、石組みの西洋建築と比較して一般的に軽いというか、すき間風が多いというイメージがあるが、立川家は正反対である。座敷の床周りや箱階段など、堅く重い木を大工さんが丁寧に時間をかけて仕上げているために、百年たった今も一ミリの狂いもない。

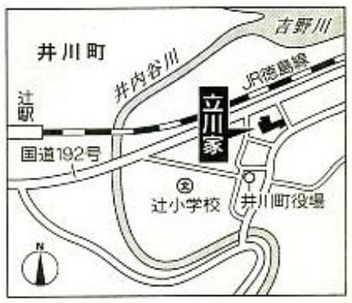
おばあちゃんは「あと五十年しても狂わへんわ」と誇らしげであった。この立川家に触発され違った形で応えたのが、われわれの仲間の田處博昭氏である。阿波学会後も単身で補足調査をして、立川家の雰囲気を紙の上に凝縮させるかのような図面は、われわれの間では伝説となっている。

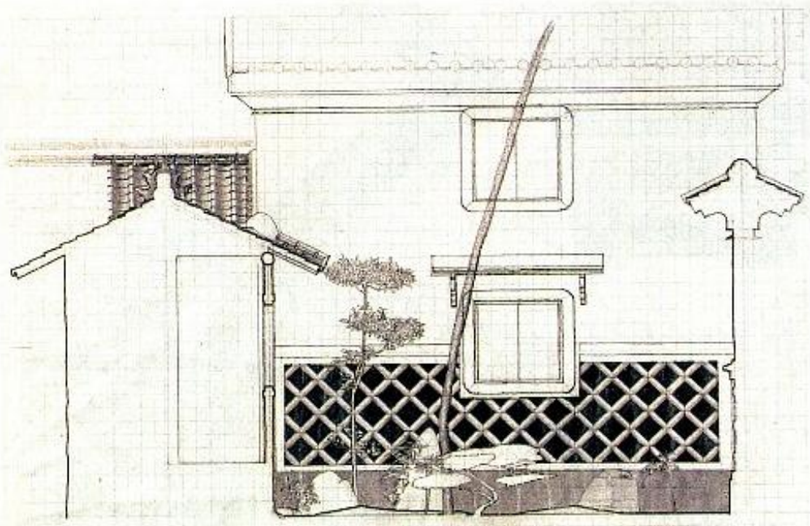
これからも立川家は日本建築らしからぬ重厚さを保ち続けることで、また違った新鮮な思い出が加えられるであろう。

（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。



栗林公園の庭師が小堀遠州流で造った中庭。見事な石組みに木々の緑が映える





中庭の断面図（田處博昭氏作成）

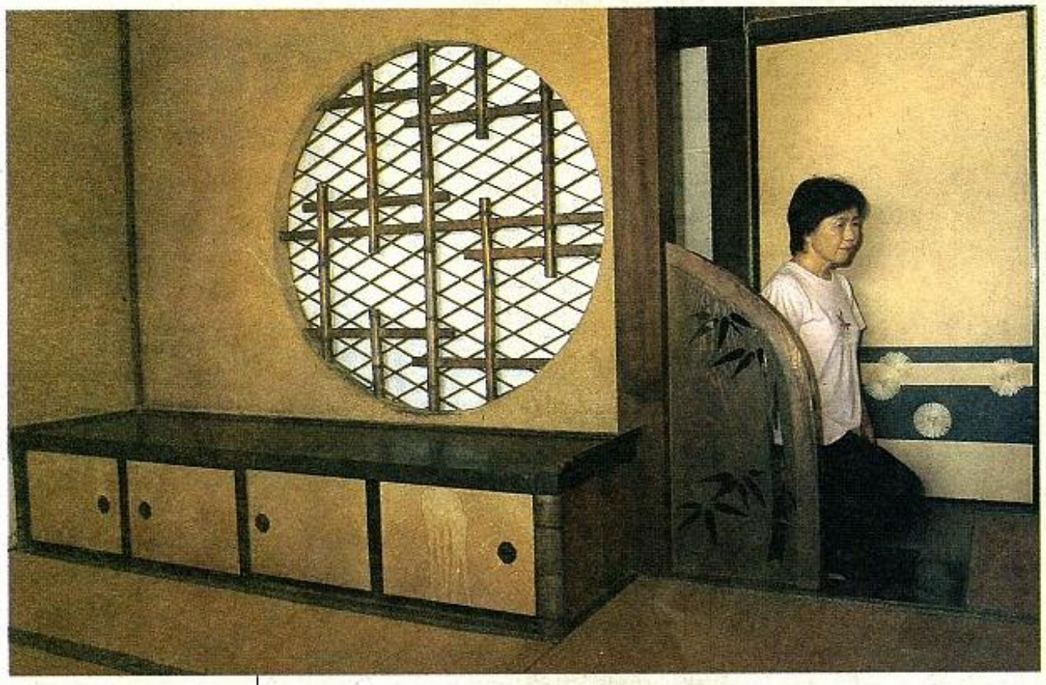
床柱は鉄刀木、違い棚は黒檀、障子枠には紫檀が使われ、落ち着いた中にも贅を尽くした床の間

《メモ》立川家　井川町辻。立川家はかつてたばこの製造販売で財をなした商家である。母屋は1903（明治36）年の建築、掛け軸に保管された家相図で特定。建築主は2代目山口屋甚五郎・貞太郎で、普請に造詣が深く、十数件目の自作といわれる。中庭は、高松栗林公園の庭師が小堀遠州流で作庭したとのこと。

とくしま建物再発見 ㉘

日本瓦の伝統的様式

森家（徳島市）



客を招いた2階には、工夫を凝らした手すりや丸窓がある

1階のオモテには、西側の庭からさわやかな風が吹き込む

かつての春日には人家が少なく、のどかな田園風景が広がっていた。今ではJRが高架になり、新しい住宅が立ち並んで昔の面影は一掃されてしまっている

江戸時代末期に建てられた森家には建築的な見どころが多い。長屋門の扉はケヤキの一枚板、かつての藍づくりを思いださせる日本瓦ぶきの本格的な二階建て母屋と藍寝床の配置。また、築後百五十年を超える母屋の二階にある立派な材料で作られた客間、階段の手すりと地袋、丸窓のデザイン、二十八㌢角で二階まで貫かれたケヤキの大黒柱、一階座敷の長押に付けられている鋳物のくぎ隠しなどである。

中でも二階を客間として重視した建築計画は非常に興味深い。客間は一階のオモテに設けられるのが一般的だが、江戸時代は身分により厳しい建築制限が加えられており、庄屋の家柄にあった森家といえども、ぜいたくは許されていなかった。このため人目に付きにくい二階にお金をかけたものの思われる。

一階の座敷には北や南、西側からさわやかな風が通り抜けるそうである。このような快適な居住性は、その時々の生活に対応できるように改造を重ねることによって保たれてきたものだろう。現役の住まいとして森家が今も大切に使われているゆえんである。

当主は十四代目の経夫さん。母屋には十五代目にあたる長男の英雄さんが暮らしており、県外にいる子供たちの部屋もそのままである。

ところで、徳島県建築士会の仲間であり、森家の調査に携わっている坂口敏司さんの父親・文雄さんが森家に出入りしていた大工と分かり、お話をうかがった。文雄さんは弟子時代には森家の蔵の土壁補修に携わり、独立してからは母屋の外壁の下見板の補修、サッシ窓の取り付けのほか、ぬれ縁を廊下にしたり風呂や便所の増築をしたりしたそうで、このような地道な修復が建物の生命を永らえてきたのであろう。

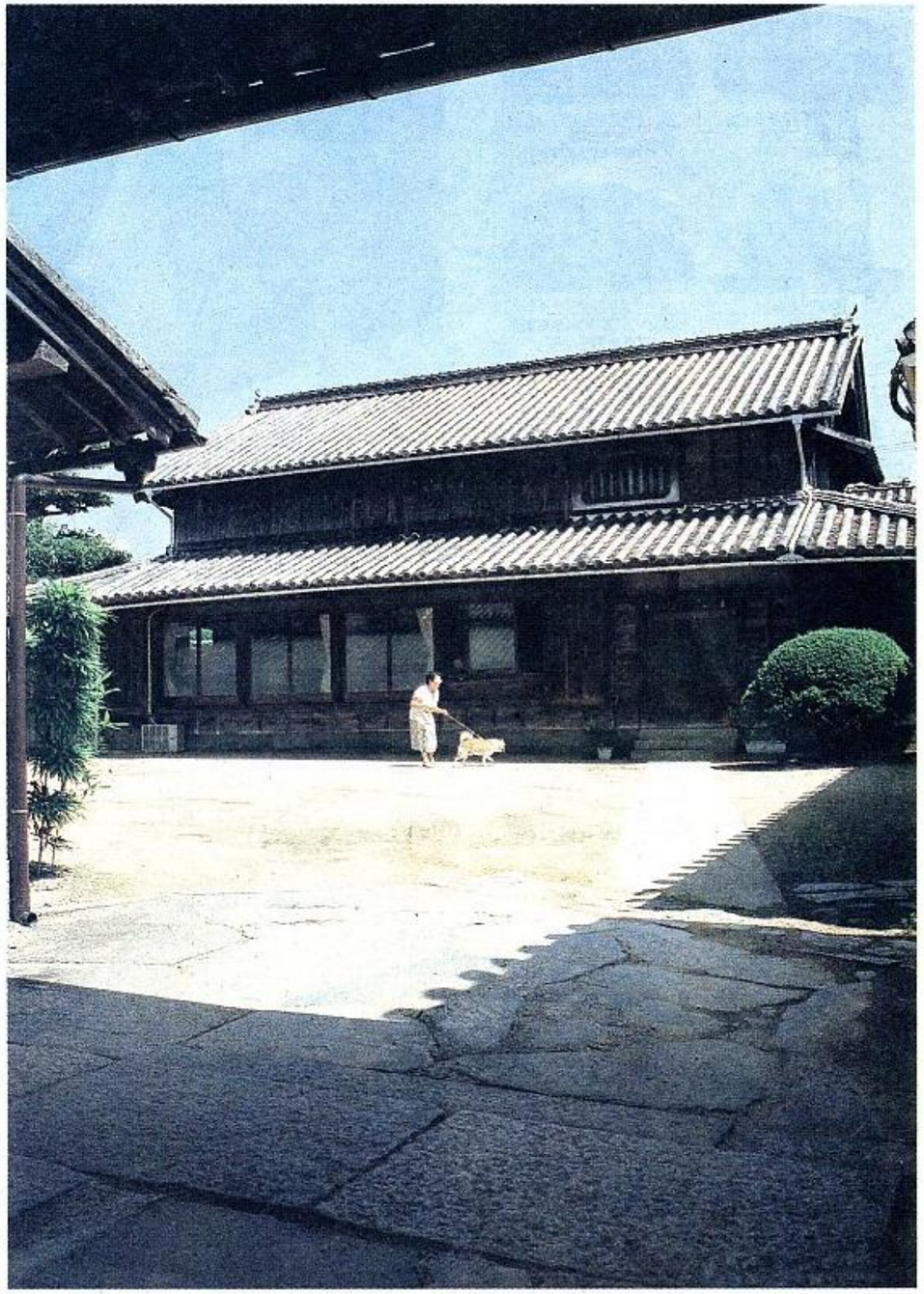
森家の調査には、敏司さんの二男純平君が寸法取りなどを手伝ってくれた。父親がやっている古い建物の調査に興味があるのだそうだ。「大きくなったら建築の仕事をするんか」と聞くと「せえへん」と言ったが、間を置いて「するかもしれん」と言い直した。カエルの子はカエルというが、親子三代にわたって何らかの形で森家にかかわっていることに面白さというか、因果めいた不思議さを感じた。

粗末なものを使った庶民の住宅は、こまめに建て替えざるを得ない一面がある。しかし、以前に紹介した井川町の立川家と同様、森家のように丈夫な材料を厳選した家は百年永らえる。

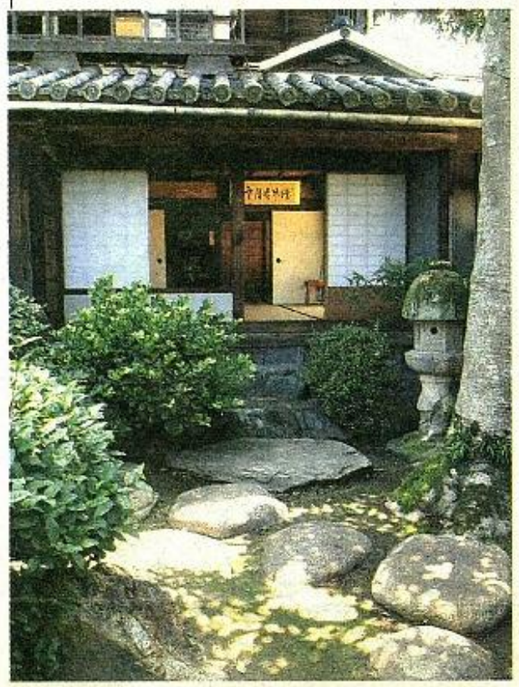
ただ、所有者に愛着がなくなったり住むことをやめてしまったり、あるいは維持していく技術が途絶えたり技術者がいなくなったりすれば、このような住まいも消滅してしまうであろう。

今回、森家にかかわったことで建築技術者として何ができるのか、何をすべきかをあらためて考えさせられた。（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。



堂々たる風格をもつ日本瓦ぶき2階建ての母屋



《メモ》森家　徳島市春日2丁目。かつて庄屋を務めた家柄で、藩政時代には名字帯刀が許されていたという。母屋の建築は、棟札により1851（嘉永4）年と特定される。山から木を伐採して建設現場近くの畑で材料の切り組みをした。その様子を見るために、城下町から遊山に来る人もいたという。

とくしま見聞　建物再発

―㉝―

多田家とミセ造りの町並み（宍喰町）

往時の繁栄物語る

徳島県では山や平野の至る所にかやぶき民家（ほとんどがトタン巻き）が残されているが、宍喰町ではかやぶき民家は三棟しか確認できなかった。宍喰の伝統的民家は瓦ぶき建てである。二階部分の天井が低い「厨子二階」と呼ばれる形態で、最初から瓦ぶきであったものと、かやぶき屋根から瓦ぶきに替えた「小屋下げ」の二つがある。

このように瓦ぶきが多いのは、宍喰町が台風の通り道に当たり、雨が多く強い風が吹くという気候や、人工造林でカヤ（ススキ）が生えなくなったこと、さらに、かやぶきより費用がかかる瓦ぶきでも可能だったという住民の経済的な余裕が考えられる。

今回紹介する多田家は宍喰浦北部の久保地区にある元組頭庄屋の家柄。宍喰浦から奥まった狭い道路に面する表門と石積み塀が、時代を超えた建物の存在を予感させる。表門を入り、石積み塀に沿って進むと、間口の広い堂々とした母屋が建つ。

玄関構えの上部の家紋や軒げたを支える「持ち送り」の彫刻、欄間の透かし彫りなどに本格的できめ細かいデザインが施されている。一九七六（昭和五十一）年三月「阿波の民家　徳島県民家緊急調査研究報告」で、主要民家六十戸の一つに挙げられたのもうなずける。

現在の多田家は日常的に居住されていないにもかかわらず、よく帰ってきて管理されており、今も当時の面影や雰囲気をそのまま残している。

この宍喰浦地区には、多田家のほかにも百々（どど）家と田井家という二つの組頭庄屋があったという。この二軒はかつて宍喰浦南部の宍喰川北岸に並んで建っていたが、今、その屋敷跡はない。組頭庄屋は一村に一つある庄屋を数村束ねる上役で、小さな宍喰町に三つも組頭庄屋があったのである。隣国土佐に接する軍事上の要所だった宍喰が、その後漁業と林業で富がもたらされ、町全体として繁栄した結果であろう。

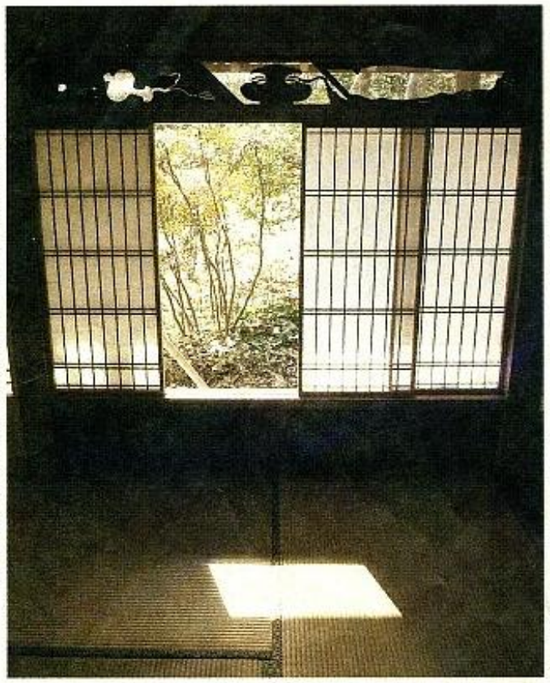
町民の暮らしにゆとりがあったことは、ミセ造りのある町並みにも感じられる。ミセとは漁村の住まいの軒先に設けられるもので、雨戸を作業台や縁台として利用する装置のことである。多様な形状の持ち送りが付いていて、町並みを形成する一つの要素となっている。

広い道路に面するミセに、おじいちゃんやおばあちゃんが座り、ひなたぼっこやおしゃべりをしている姿を見ると、こうしたミセ造りや厨子二階の民家が存在する町並みは、長い年月をかけてつくられてきた宍喰特有の財産であることが分かる。多田家はそうした宍喰の民家のシンボル的な存在である。

ただ、時代とともにミセ造りも減り続けている。宍喰の歴史の生き証人として、その価値に理解が深まり、存続されていくことが望まれる。多田家も現在のまま生き続けてほしいと願う。（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

＝このシリーズは毎月第4土曜日に掲載します。

身分の高い人を迎える玄関を持つ多田家。組頭庄屋だった昔日をほうふつさせる



本格的できめ細かなデザインの欄間透かし彫りと、書院の障子

宍喰浦の町並みとミセ造り。長い年月をかけてはぐくまれてきたコミュニティーの重みが感じられる

《メモ》多田家　先祖は赤穂からきた戦国武士という。母屋は1862（文久2）年の建築で6間取り。身分の高い客を迎える玄関を構え、オモテの接客座敷が整っている。その奥に板の間、茶の間、オクという家族の座敷がある。

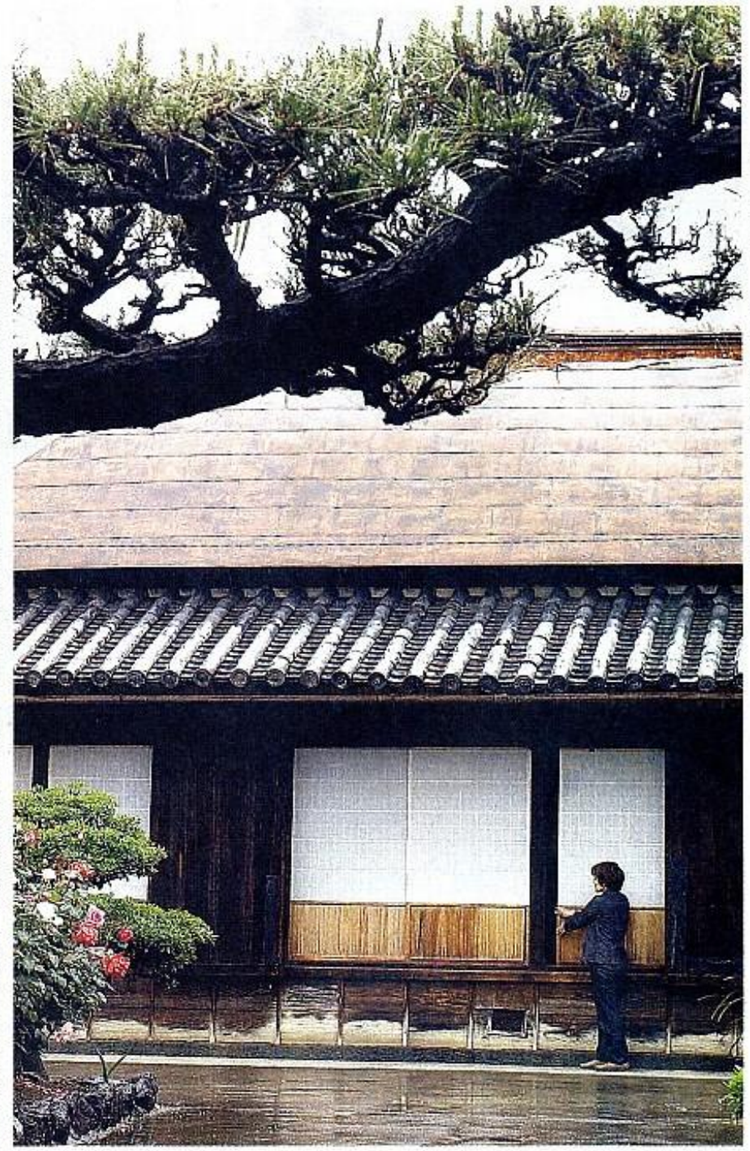
宍喰浦の町並み　1512（永正9）年、津波による被害の復興事業で、現在見られる格子状の道路や街区がつくられた。祇園通りや寺町などの町名も付けられている。

とくしま建物再発見 ㊳

端正なカヤぶき民家

佐藤家（徳島市）

長い歴史の積み重ねを感じさせる内部空間のつながり、奥深さ



トタンの上屋、本瓦ぶきの下屋、障子で構成される母屋は、庭木や石積みの練り塀の自然とマッチした景観をつくっている

機会があって二〇〇一、〇二年度に徳島市内のカヤぶき民家の調査を行った。その結果、四百二十二戸のカヤぶき民家の存続を確認できた。

この数は、徳島市の全世帯数に比べると少ないように思えるが、県庁所在地あるいは地方の中心都市という徳島市の性格を考えると、国府や入田、一宮各町に集中しているとはいえ、カヤぶき民家がまだこんなに残っているのか、とうれしい気持ちにさせられる。

これらのカヤぶき民家は、建設に至った由来や時期、その後の改造や伝承、現在の使われ方と今後の方向性などについて、民家ごとに異なっており、形態や雰囲気もそれぞれが個性を持っている。

佐藤家は、徳島市中心部に近い庄町に残る数少ないカヤぶき民家だ。建設当初は建設年月も大工、建て主の名前も書かれていなかった。家人に聞くと建築されて二百年余りという。一般の趣やカヤぶき民家が持つ素朴で端正な美しさをいまだに残している。

母屋は土間の天井が張られておらず、天井裏に上がることができる。棟札は見つからず、寵築後二百年余という伝承は永通宝で打ちつけられていた祈とう札に案外正しいのかもしれない。

土間の上部で荒々しく組まれた太いはり、さらにその上に土がかぶせられたヤマト天井と、合掌小屋組で囲われた真っ暗闇の天井に江戸末期から明治にかけて使われ始めた大黒柱が佐藤家には使用されているので疑問は残る半面、柱が一間（一・八㍍）ごとに入る古い形式であることから、相当な年月がたっていたらしい。表の練り塀の石は大原町の大神子から持ってきたという。

カヤぶき

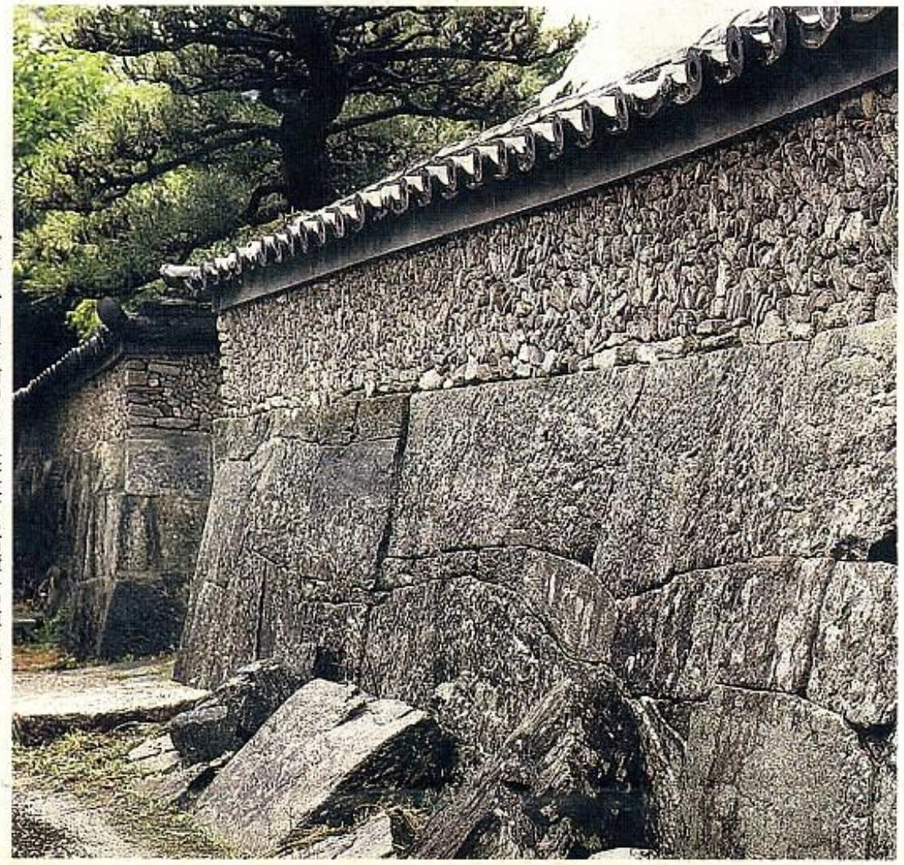
カヤはススキのみをいうが、民家では「草の種類を問わず草でふいた屋根」を指すことが多い。草の種類にはカヤ、ヨシ、麦わらなどがあるが、現実にはほとんどの民家がトタンなどで覆われている。

厳密には、カヤぶき民家に限らず、百年を目標に材料を選び、それが可能な工法で建てられ、いろいろ手を加えながら大切に使用されてきた。現代だからこそ、そのような住まいの作法についてあらためて考え、見直さなければならないのではないだろうか。本物の材料を当たり前のように使った佐藤家は、われわれの身近に存在することで、さりげなくそのことを示唆してくれている。（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦字花面、写真は末澤弘太）

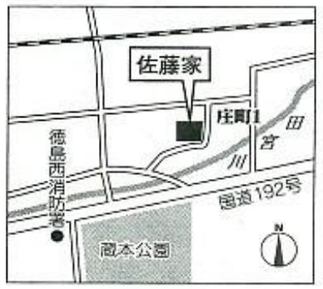
《メモ》佐藤家　徳島市庄町1。代々農家であるが、庄屋をしていたとの話もある。1891（明治24）年生まれの当主の祖母も現在の母屋で生まれたが、その当時でも建築から裏、それらが下の室内空間と連続するさまは、長い歴史の積み重ねから生み出されてきたものであろう。

外部では、トタン巻きの上屋と本瓦ぶき下屋、さらにその下の障子で構成される外観が、庭先の木や自然の石を積み上げた練り塀とマッチして、懐かしくも堂々とした独特の景観をつくっている。

住宅は二十年や三十年で



さりげなく、当たり前のように存在する石積みの練り塀



（おことわり）毎月第四土曜日に掲載していた「とくしま建物再発見」は、六月から第二土曜日付に変わります。

とくしま建物再発見 ㊸

繁栄象徴 個性的な造作

うだつの町家と町並み（貞光・池田町）

二層うだつが連なる貞光。ここでしか見られない町並みだ

斜めに傾く1階の袖壁は池田の町家の特徴

防火を主目的に生まれたうだつ。さまざまなデザインが施され、一つ一つが異なる＝池田町内

徳島でうだつの町といえば国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている脇町が全国的にも有名だが、貞光や池田にもうだつのある町家が残されている。というよりも江戸末期から明治にかけて、吉野川流域の水運で栄えた町や旧街道沿いなどでは、うだつのある町家が競うように軒を並べて町並みをつくっていたと思われる。

うだつは隣家からの延焼を防ぐという現実的な要求から生まれてきたものだが、周りより自分の店を目立たせるという装飾的な意味がだんだんと加わり、覇気がなく出世できないことを「うだつが上がらない」と言われるまでになった。

先日、脇町の観光案内ポランティアから、隣り合った店ではうだつの高い方が新しく建てられたもので、後から建てる店はうだつを隣より高くする、と聞いた。同業者として互いに協力しながらも、少しでも自分の店を伸ばそうとする自己努力の表れだったのだろう。

うだつには鏝絵（こてえ）や家紋が付けられて二つ一つに特徴があるほか、存在する場所によっても異なる形態を持っている。例えば池田では、うだつの下の一階の袖壁を斜めにするなど、他にはあまり見られない町家がある。貞光の特徴は、二層うだつである。江戸時代、二階は主に物置として使われていたため階高が低く抑えられていたが、居室として利用されるようになった明治以降は徐々に高くなる。このような変化に対し、うだつを二段構えにして見栄えを良くしたのが二層うだつである。

道路に面した平入り二階建てという町家の基本的な形態や、瓦や土壁などの材料による制約の中で、このような細部の積み重ねが町並みに微妙な変化を与え、全体として個性的で生き生きとした雰囲気を醸し出すようになった。

なぜ、うだつがこのように徳島で重宝されてきたのか。うだつの町並みを存立させてきたのは、徳島の風土であり地域社会だった。

脇町は藍の集荷で富をなし、貞光と池田は葉タバコで栄えた。それは徳島藩が塩と並ぶ三大産業として奨励したおかげである。その結果、藩全体が潤い、脇町や貞光、池田を中心とする地域社会が生産や生活の場として成り立っていった。

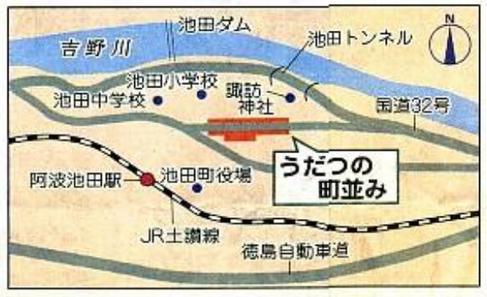
そのような地域社会で生み出されたうだつは、本来の防火という目的を超え、地域繁栄の象徴として人々の心に根付いてきたのだろう。うだつやその町並みは個人所有でありながらも、地域社会あるいは徳島県全体の共通財産なのである。

かつてうだつが放置されたままだった脇町では、重伝建に選定されてから町家の修復が進み、映画のセットのような雰囲気さえ感じられる。

一方の貞光や池田は、以前の脇町のように現代風の改造が加えられたり空き家や空き地が交じったりして雑然としている。

しかし見方を変えれば、生活感があふれているともいえる。ただ、伝統ある町並みを継承していくのであれば、今、なんらかの手を打たないと、うだつは消えてしまうだろう。（田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦、写真は末澤弘太）

＝このシリーズは毎月第2土曜日に掲載します。



《メモ》

貞光　交通の要衝で、江戸時代以降、商業の町として栄える。一宇街道沿い約700㍍の道筋にうだつの町家が残され、ほぼ中央部に二層うだつの町並みを形成している。

池田　江戸末期より葉タバコを扱う商業の町として発展し、明治後期に最盛期を迎える。本町通り周辺には、その多くが明治期に建てられたうだつの町家が残されている。町の有形文化財である旧真鍋家が「阿波池田うだつの家・阿波池田たばこ資料館」として一般公開されている。

とくしま見 建物再発

㊽

松浦酒造場(鳴門市)

職住一体のかやぶき民家

阿讃山脈を背景にしたのどかな田園地帯に、時を超えて伝統的な産業景観が形成されてきた

この度、建築士の仲間と鳴門のかやぶき民家を調べる機会があり、百九十五棟の残存が確認できた。鳴門のかやぶき民家は徳島県内全般に見られる形態を持ちながらも、中心部に少なく、南部や北灘に多いというように、市街地構造に合わせて立地している。

今回紹介する松浦酒造場のように、地主、庄屋、企業家などの家柄で、建設年代が古い上に規模が大きく、特色のある家がいくつか残されているのも、鳴門の特徴である。

松浦酒造場の長屋門を入ると、玄関構えの六間取りという堂々とした母屋に圧倒される。外壁は黒しっくいで、彫刻の施された持ち送りが連続して軒げたを支えるという、あまり例のない外観を持つ。

内部の応接間には歴代の造酒札が飾られ、やり掛けがある。かつては土間として使われていたこの部屋に、当家の歴史が凝縮されている。

天井裏はヒロシキになっており、女性のお手伝いたちが寝泊まりしていた。ヒロシキに登ったら階段を外し、誰も上がれなくしたという。

徳島でよくみられるヒロシキは、土間の隅で上部のはりからつって造られるかごのようなつり部屋がほとんどで、当家のようなヒロシキは珍しい。またヒロシキに上る開口から垣間見るはりは太く、荒々しくダイナミックに組まれた形に歴史の重みを感じる。

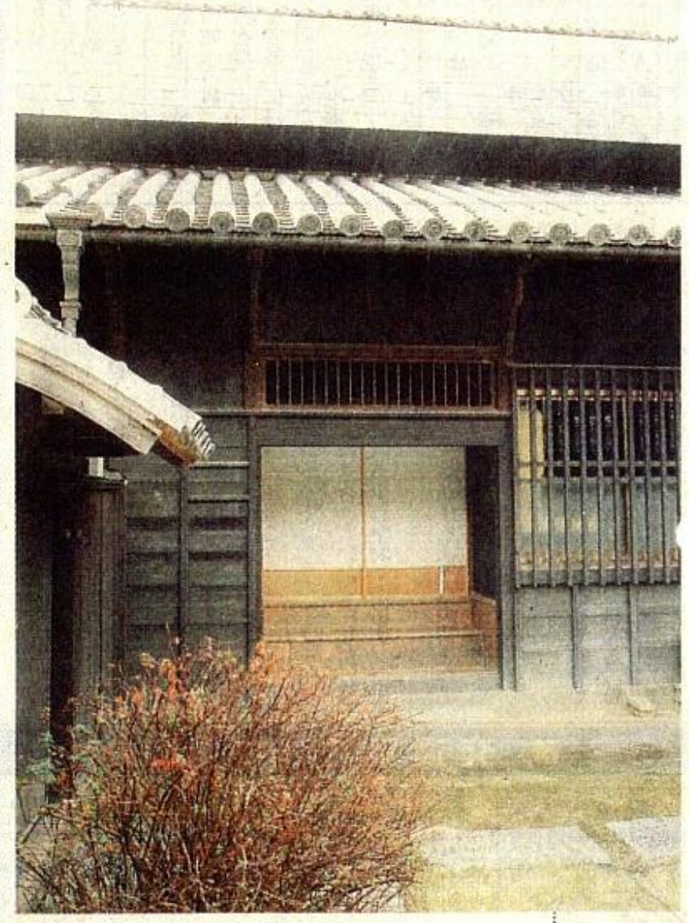
松浦酒造場は築二百五十年といわれる母屋以外にも一八〇二(享保二)年着工の酒蔵を有し、さらに道路を挟んで当家から分家した同じ松浦姓で一八二六(文政九)年創業の福寿醤油(しょうゆ)とともに、伝統的な産業空間と景観を形成している。

福寿醤油の母屋もかやぶきで、玄関構えも共通している。このかやぶきトタン屋根や酒蔵の瓦屋根の重なり、福寿醤油の煙突は、阿讃山脈を背景とする平たんな農村地帯に、酒や醤油を製造する特別な施設が存在し続けてきたことを主張している。このようにかやぶき民家や酒蔵が現役のまま使われているのは、鳴門だけでなく県内全域でも珍しいと思われる。

私はこれまで伝統的な町並みや民家を取り上げ、かやぶき民家では井川町の中瀧家と徳島市の佐藤家を紹介した。周りで採れる材料で造られた中瀧家は典型的な山の民家で、山で生活することの快適性と貴重さを教えてくれた。屋根のトタン以外に当初の姿から手が加えられていない佐藤家は、徳島市の中心部近くに立地するにもかかわらず、かやぶき民家としての素朴で端正な美しさを残している。

松浦酒造場は、生産施設の中で居住、応接空間としても使われ、生き延びてきた。他のかやぶき民家からみればかなり特異なものではあるが、それが家の歴史、個性であり、それぞれの家が持つ社会的な役割といえる。(田村栄二・日本建築学会会員＝鳴門市里浦町里浦花面、写真は末澤弘太)

＝このシリーズは毎月第2土曜日に掲載します。



黒しっくい壁、軒げたを支える持ち送り、玄関構えなど、特異な外観を持つ

ヒロシキに上がる天井の開口や造酒札が、当家の歴史の重厚さを感じさせる

《メモ》

松浦酒造場　先祖は元禄(げんごう)で活躍したという九州平戸の松浦党水軍で、大麻町池谷辺りには松浦姓が多い。1750年ごろ、初代豊朗氏が現在の母屋を建設、1804(文化元)年、2代目直蔵氏が松浦酒造場を創業した。当主の恭之助氏(75)は8代目に当たる。

鳴門のかやぶき民家　2003年9月末で195棟を確認。市の南部に広く分布し、北灘にも残存している。市の中心部やウチノ海を囲む北西部はわずかに残されているだけで、さらに空き家化が進んでいる。